



Title	2018年度「方法論の会」の開催にあたって：「絵本は戦争と暴力をいかに伝えるか？」
Author(s)	北原, 恵
Citation	日本学報. 2019, 38, p. 1-6
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/85147
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【特集】

2018 年度「方法論の会」の開催にあたって

「絵本は戦争と暴力をいかに伝えるか？」

北原 恵（大阪大学文学研究科・日本学講座）

(1)はじめに：日本学方法論の会

今年度の方法論の会は、韓国の創作絵本作家であるクォン・ユンドクさんをお招きした（以下敬称略）。日本軍「慰安婦」をテーマにした絵本『花ばぁば』についてお話をうかがい、議論をするためである。

『花ばぁば』（原題：꽃할머니）は、2006 年に田島征三ら日本の絵本作家たちが、中国、韓国の作家に呼びかけて始まった「日・中・韓 平和絵本」シリーズの一冊である。中国と韓国ではシリーズの作品全て（11 作品）がすでに販売されていたが、日本軍「慰安婦」だったシム・ダリョンの人生をヒントにしたこの『花ばぁば』だけは、日本でのみ出版ができずにいた。理由は、日本軍「慰安婦」問題をタブー視し議論すらままならない日本社会に第一の原因があるが、日本での出版を一手に引き受けた童心社が、シム・ダリョンの証言が公文書と一致せず、絵本の表現が「史実とは言えない描写」があることを理由にしたためたと聞く。その後、別の小さな出版社「ころから」が、日本での出版の意義に賛同する人々やクラウド・ファンディングを通じた支援によって、2018 年 4 月、ようやく出版するに至った。

日本学方法論の会は、2018 年 4 月 26 日（木）、大阪大学豊中キャンパスの大学会館・アッセンブリーホールにおいて開催された（ポスター参照）。

二部構成の会は、まず第 1 部が、クォン・ユンドク自身による『花ばぁば』の朗読で始まった。会場正面のスクリーンに絵本の原画と日本語訳が大きく映し出されるなかで、クォンが朝鮮語で『花ばぁば』を朗読し、そのゆっくりと静かなクォンの声に、集まった聴衆たちは聞き入る。会場には、出版社が持参した刷り上がったばかりの絵本も展示された。

クォンは朗読のあと、講演「絵本の創作における実証と芸術的再現について——『花ばあば』を中心に」を行い、歴史的事件や社会問題を絵本の素材に扱い創作する過程と、そこで起こった数々の困難について、具体的に語った。——「12年かかりました」。この言葉から始まったクォンの講演は本特集に収録されているが、実際にはアドリブでクォンが説明を付け加えてさらに豊かな内容となっていた(後述)。

第2部(シンポジウム)では、発表者とディスカッサントを二人ずつ招いた。まず、韓国の絵本研究者である申明浩が、発表「韓国の絵本の歴史とクォンさんの仕事」において、クォンの仕事を絵本の歴史のなかに位置付け、続いて、アクティブ・ミュージアム「わたちの戦争と平和資料館(wam)」館長の渡辺美奈が、発表「日本軍「慰安婦」を伝える——歴史と表現の可能性」において、絵本が日本で出版されなかった経緯と理由や、証言をヒントに創作した『花ばあば』と、「史実」「事実」「証言」をめぐる問題について議論を投げかけた¹。討議では、堀詩織(日本学修士課程修了)と、朴沙羅(神戸大学教員)が応答し、議論の口火を切った。これらの発表や議論の逐次通訳やウィスパリングは、申明浩、徐潤雅のほか、当日の聴衆だった藤井たけし(日本学出身)が見事な通訳してくれた。

また、当日は「方法論の会」開始に先立って、午前中にドキュメンタリー映画『わたしの描きたいこと』(クォン・ヒョ監督, 93分, 2012年)を上映した。制作に着手してから2012年までの4年間にわたる過程と、作家性と表現の軌轍をノーナレーションで記録した映像作品である²。

本稿では方法論の会での議論のすべてを紹介することはできないので、『花ばあば』で試行錯誤をくり返して生み出された表現方法について、少し補足したい。

講演の中でクォン・ユンドクは、「イメージの表現において最も難しかったのは、暴力を描かずに暴力を表現する方法」だったと述べ、何枚もの習作のスケッチを見せてくれた。絵本には、殴ったり蹴ったりするような露骨な暴力の場面は描かれていない。ではクォンはどのように暴力を表現したのだろうか。

クォンは早くから日本軍「慰安婦」問題に関心を持っていたが、今回作品を創るためにあらためてハルモニたちの証言や、歴史本や関連資料を数多く読み込んだという。最初、ハルモニたちの痛みに共感して描いたスケッチは生々しく、ぞっとするようなグロテスクさが直截に伝わってくる(クォン論文: fig.3)。軍人の頭から出てくる魚が慰安婦の女性のからだに入り込む場面や、少女が魚を握りつぶす場面を描き何度も習作を重ねたが、「復讐」やネガティブな表象に満ちたそれらを、クォンはシム・グリョンには見せられない。

試行錯誤の結果、殴る・蹴るを描くのではなく、暴力を振るうものを大きな存在として描いたり、数の多さで暴力性を表現したり、色彩などひとつひとつの表現を変えていく(クォン論文: fig.5,6)。兵隊が慰安所の部屋に入ってきてまず、脚に巻いたゲートルを解くとき、大きな恐怖を感じたという証言を聞いたクォンは、ゲートルを兵隊のからだから出てきて、蛇のようにどこにでも這い入り侵入する長い紐のような形状で描いた。顔のない人

物は、日本人兵士だけではない。花ばあばを排除し抑圧する韓国社会の持つ社会的暴力を、制服やときにはチョゴリを着た顔のない人物としても表現した（クォン論文：fig.8）。

討論では、「証言」をどのように扱うかが大きな議論になった。シム・ダリョンが慰安所に連れていかれる過程などを「覚えていない」のは、いくつも理由が考えられるが、そのひとつに文字が書けなかったことが関係しているのではないかという指摘もなされた。晩年、シム・ダリョンは識字教育を受けて体験を少しずつ綴れるようになっていく。

さらに、『花ばあば』の日本版と韓国版の違いについても話が及んだ。日本版では、シム・ダリョンが「台湾に行った」ことなどは外されている。この台湾行きは、公文書などでは確認されておらず、証言の信憑性が最も批判されてきた部分であるが、クォンによれば、「本人は台湾に行ったことは覚えていないと言っていた」そうである。だが、当時韓国社会では、「具体的な証言を求める」雰囲気が強く、「あるとき集会で横にいた人から「台湾に行った」と言うように促され、そのように証言した」という。（韓国版でもその後、台湾行きの部分は削除された）

（2）「証言」をどう読むか？

議論において、シム・ダリョンが「覚えていない」ということ自体に注目すべきだという指摘がなされたのは重要である。

ディスカッサントの朴沙羅は、聞き取りや文書の分析を通して、国境を越えて移動・移住する人々を対象にしてきた研究者である。朴によれば、オーラルヒストリー研究は2000年頃、文献資料の空白を埋める補助的役割から、語り手の主観を伝える役割へと変化したと定説化されているが、小さくされた人々の声は、「きわめて主観的なリアリティ」などと矮小化されてはならない。それこそが、これまでの歴史記述にとって代わるべき事実なのだ」という。会場でも朴は、「語り手の主観を聞いてよしとする」傾向があったことを批判し、芸術やフィクションは、現実以上の現実を作るものだと言った。

朴沙羅が翻訳・紹介した『オーラルヒストリーとは何か』のなかで、著者のアレクサンドロ・ボルテッリは、正確な事実を探究することが有効かつ必要であることを尊重しつつ、記憶の錯誤や、勘違い、語られる内容に一貫性がないことを、史実と異なるとして切り捨てるのではなく、主観や想像や願望の重要性に目を向けなければならないこと、そして、ある出来事が語りや記憶を生み出すときの様子を探究すべきだと提唱し、オーラルヒストリー研究のあり方に一石を投じた。

証言の不確かさを史実の間違いと同一視する見方を批判し、その裂け目やズレに豊かな意味を探ろうとするボルテッリの考えは、クォン・ユンドクの『花ばあば』の制作にも通底している。

「もう一つは、証言を個人的な記憶であると同時に社会的な記憶としてみる観点である。証言の真偽問題は見過ごせないものだが、その証言が置かれている社会のコンテクストも一緒に見なければならない。私たちは、社会が証言者に何を要求しているのかを証言から読み取る必要がある。絵本の創作における再現とは、単純に個人史の事実関係を検証することではない。私はこのような観点から、私の絵本がシム・ダリョンハルモニの証言に含まれている社会的な記憶までも一緒に再現する必要があると考えた。」(クォンの講演より)

「その証言が置かれている社会のコンテクスト」を見つめ、「社会が証言者に何を要求しているかを証言から読み取る必要がある」というのは、まさに、シム・ダリョンの「台湾行きの証言」の生成・普及・批判に関わる問題であろう。日本版や韓国改訂版において、台湾行きの部分を削除したというのは、単に「史実に合っていない」という理由だけではなかったはずだ。

クォン・ユンドクは、1948年に韓国済州島で起こった4・3事件を題材にして、最近『木のはんこ』という新作を発表している。『木のはんこ』は、虐殺の現場で一人生き延びた少女の物語である。大枠は史実に基づきつつも、警察によって岩にたたきつけられ殺された赤ん坊は、三歳の幼児に設定され、その幼児が救い出されて生き延びる話に変えられている。その変更の理由についてクォンは、4・3事件に関わる人びとや経験を「善人 vs 悪人」「被害 vs 加害」の構造に二分するのではなく、その多様な経験を生かすことが作家の役目であり、絵本は社会を変革できるメディアなのだと『木のはんこ』の出版に際して語っている⁵。

『花ばあば』が日本で長い間出版できずにいたのが、日本軍「慰安婦」にさせられた当時、どこに連れていかれたかもわからなかった少女シム・ダリョンの記憶が曖昧であり、公文書と一致しないことを理由に挙げられたとするならば、その議論の在りよう自体が批判的に検証されるべきだろう。

一方で、絵本や文学は芸術だからフィクションであれ何を描いてもよい、だから、『花ばあば』も史実に忠実である必要はない、という議論の立て方がある。だが、このような「史実か、フィクションか」「歴史か、記憶か」という二分法を温存したままの発想には問題がないか。クォン・ユンドクは、『花ばあば』をフィクションだと断りつつも、証言の信憑性が疑わしい部分については絵を描き直しているが、それは絵本が「史実に忠実でなければならない」という理由ではなく、より普遍化した問題として提示するためだったと述べている。「史実かフィクションか」の二分法を迫る議論は、『花ばあば』をめぐるでも繰り返され、人々の思考を停止させているように思える。

これらのことを考えるときに、有効なのは米山リサの記憶と歴史に関する議論である。

米山リサは、「私は「記憶」を「歴史」の反対概念としては定義しない」という⁶。米山は「記憶」を「普通の人々の過去の体験についての、純粋で真正な知」であり、一方、「歴史」を「文化的エリートや支配階級などの権力の所産」であるというナイーブな思い込みを批判し、「歴史」と「記憶」のいずれもが、常に権力の行使の網にからめとられており、抑圧の要素を伴うことを指摘してきた。そして、過去を知るための手立て（映像、記憶、語り、遺跡、慰霊碑、スローガン、記念式典、モニュメント等々）によって伝えられる知が、「すでに幾度も人の手を介したものであり、真正な過去を私たちに直接伝えているものではない」ことを看破した。「表象の真正さや、過去の純粋な再提示ではなく、失われたものは二度と十全なかたちで取り戻すことはできないという認識こそが、知の充足性への批判的態度を生む」という指摘は、戦争や暴力の表象において切実な視点である⁷。

だが、依然として「記憶」や「証言」はフィクションと関連付けられ、二級の歴史として扱われ、「記憶」を「歴史」の反対概念としてみない認識は人々のあいだに根強い。「国家の集合的記憶に対峙する純粋な記憶」として構築されてきた記憶や証言の数々。だが、本当にそうだろうか？ このような素朴な思い込みは、「証言」の中に「史実」との齟齬があると、途端にその「信仰」を揺るがしかねない。齟齬は決してそれらの「証言」を貶めることではない。問題は証言を聞く側にあるのだ⁸。

日本軍「慰安婦」問題に関して日本社会ではますます議論や表現の場が失われてきている。一枚岩の慰安婦表象ではなく、様々な場で、多様な表現と議論ができる空間を創ること。今回の方法論の会はそのような小さな場を創る実践のひとつである。



絵本は戦争と暴力をいかに伝えるか？



著者：米山リサ
発行：2018年4月26日（水） 13～17時
会場：大塚駅前プラザ 大学館・アセンブリーホール
入場料：無料
主催：大塚駅前プラザ 大学館・アセンブリーホール
共催：大塚駅前プラザ 大学館・アセンブリーホール
お問い合わせ：大塚駅前プラザ 大学館・アセンブリーホール



当日の会場風景

注

¹ 本号では、クォン・ユンドクと申明浩の発表原稿を収録し、渡辺美奈の発表については同様の内容で『ふえみん』(2018年7月5日号)に寄稿した原稿を再録した。

² クォン・ヒョ監督『わたしの描きたいこと』(DVD:日本語字幕)日本では2018年ころからが販売。同作品については、ユ・ソンヒ「慰安婦問題 興奮・怒りを越えて、平和の温もりを込めたかった」『ハンギョレ』2013年8月(<http://japan.hani.co.kr/arti/culture/15312.html>; 2019年3月1日閲覧)

³ 朴沙羅「幻の「転回」——オーラルヒストリー研究の対象と方法をめぐって」『現代思想』45-20, 2017年11月号, p.109.

⁴ アレッサンドロ・ボルテッリ『オーラルヒストリーとは何か』(朴沙羅訳)水声社, 2016年。

⁵ 北原恵「クォン・ユンドクさんの絵本世界——創作が史実を描く困難と可能性」『ビープルズ・プラン』(アート・アクティヴィズム 81) 73号, ビープルズ・プラン研究所, 2016年。

⁶ 米山リサ『広島——記憶のポリティクス』(小沢弘明他訳)岩波書店, 2005年, p.36.

⁷ 同前, 「日本語版への序文」p.xi.

⁸ 本稿を読んだ渡辺美奈氏から、「記憶」と「証言」という概念の違いについてもっと考察すべきではないかという指摘を受けた。今後の課題としたい。